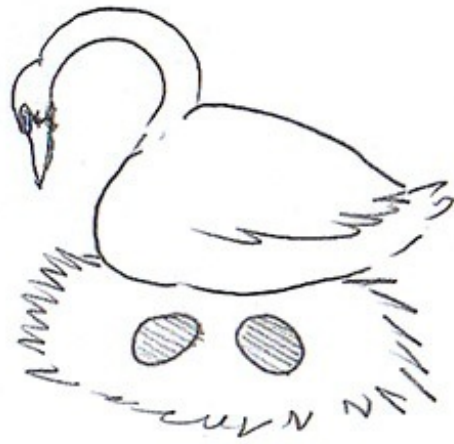




ある湖のほとりで
一羽の白鳥が



たまごを2つ
産みました。

産まれたヒナは
うりふたつ。

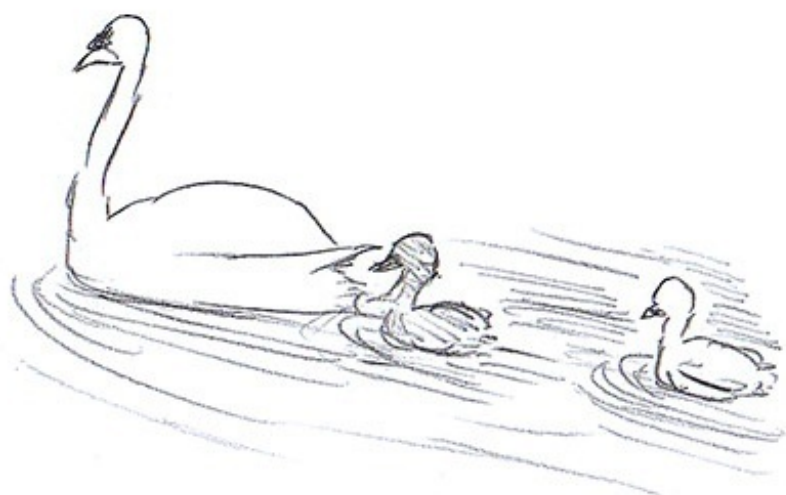
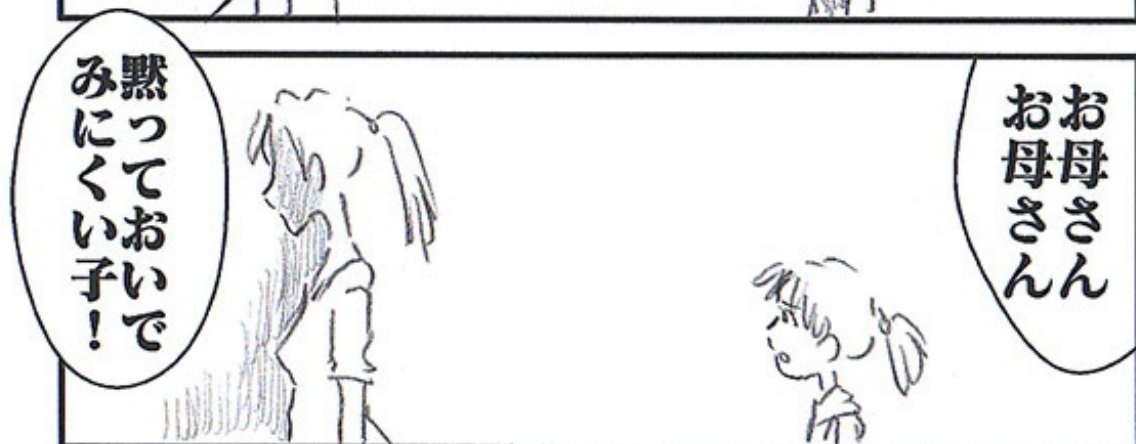


ただひとつ
ちがったのは

姉は灰色の羽。



妹は
純白の羽でした。



羽の白い妹は
なぜか母親に
うとましがられました。



どうして
そんなこと
言うの？

妹のほうが
わたしより
ずっときれい
なのに。



白鳥は

ヒナの羽は
灰色だと
決まっているの。



お母さんは
おかしいわ！

私は

いいの
姉さん。

まちがって
産まれてきたの。



双子の姉は



暗くよとみかけている
妹のこころを

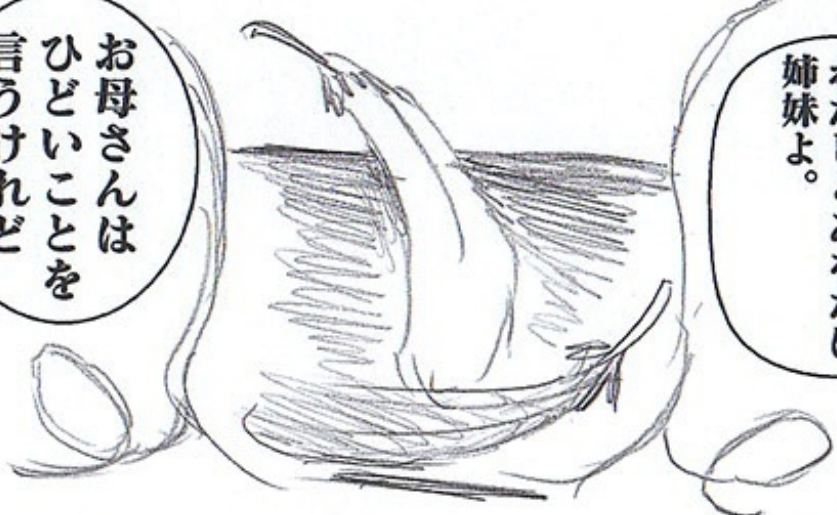


守ろうと
思いました。



色はちがっても
わたしとあなたは
姉妹よ。

お母さんは
ひどいことを
言うけれど



あなたは
わたしより
ずっとずっと
美しいわ。

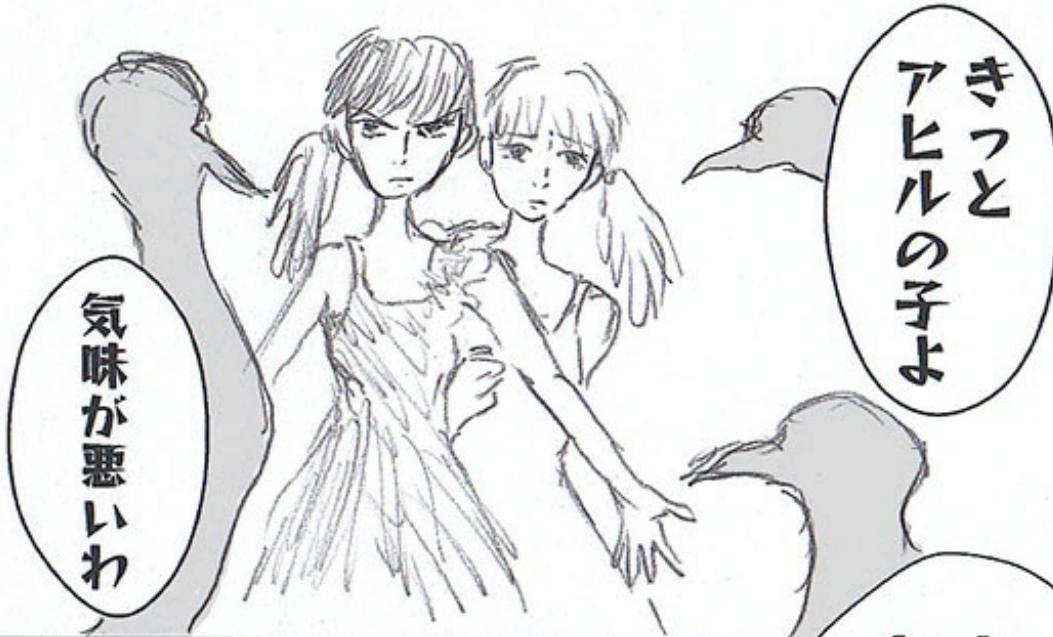
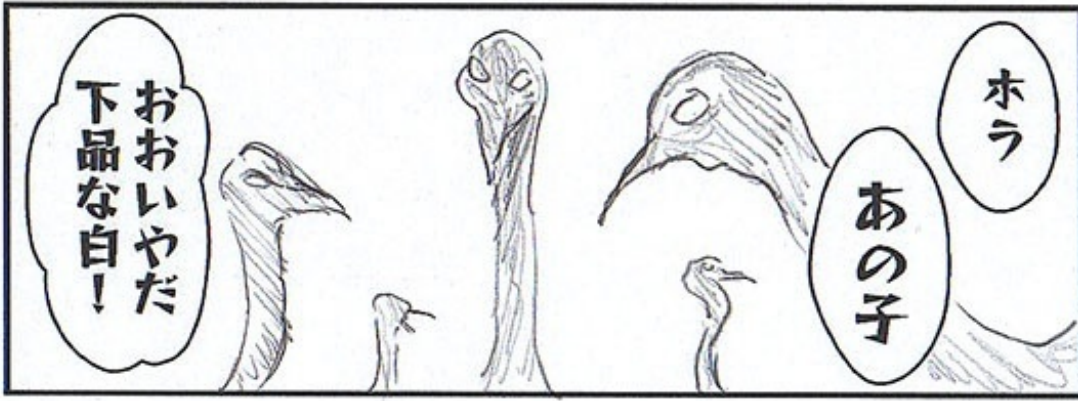


だからどうか
自信をもつて



ふたりで生きて
ゆきましょう。







お母さん！

姉さん？



お母さん！



どういふ事なの





どうして
連れ戻したの

どうして妹を
置いていったの



違う！

わたしは
あの子の
姉だもの！



私の娘
なんかじゃない！

あんな子は





大丈夫

あなたは
誰よりも
きれいだよ



わたしは平気。
何を言われても
平気。



ただ
皆わからずやな
だけなのよ


でも




自信を
持ちなさい。



どうすれば…



東に
小さな
湖がある。



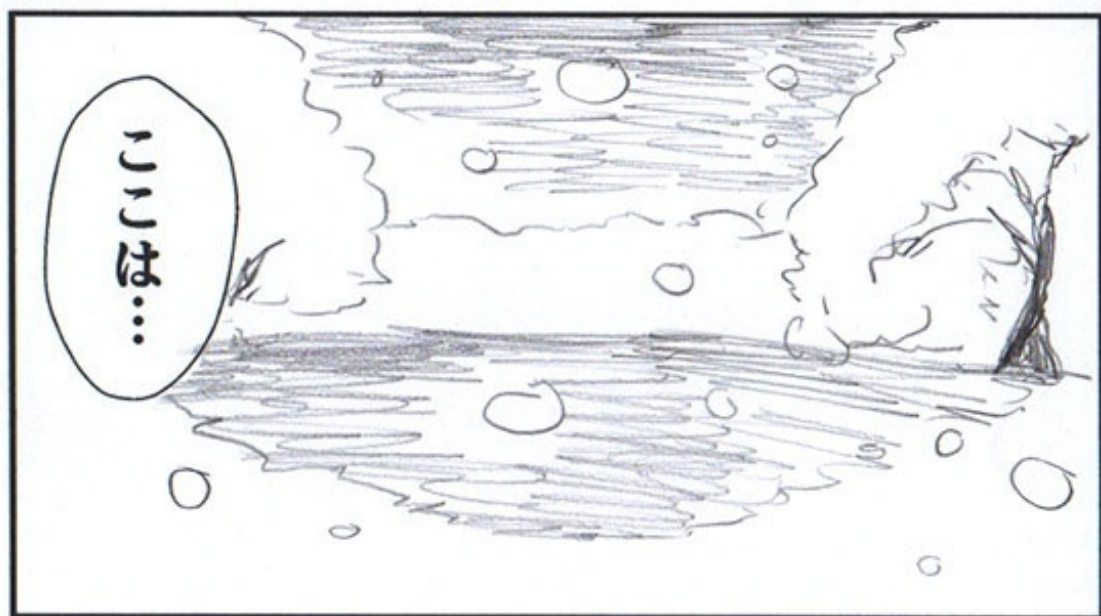
そこには
誰も
住んでいないよ…



ある夜
暗闇の中。



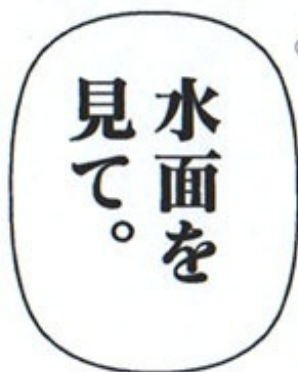
双子の姉は妹を
空へ連れ出しました。



いっせ...

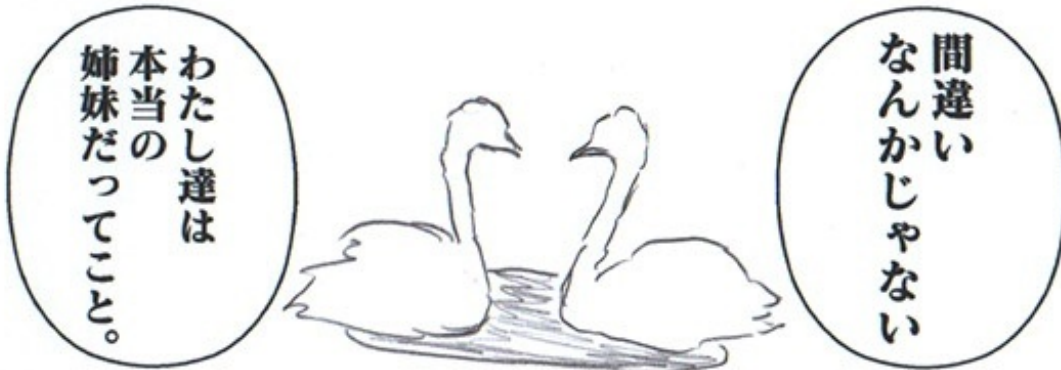


わたし達
だけの
湖畔よ。



水面を
見て。





あなたは
生まれながら

だれよりも
美しかったのよ。



姉さん
ごめんなさい



これからは

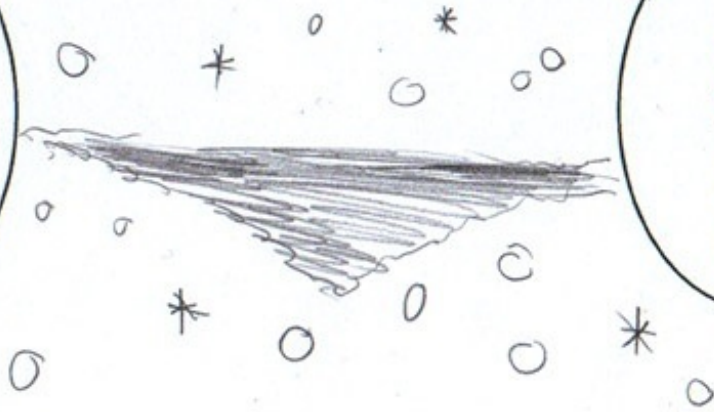
自分に誇りを
持ちなさい。



泣かないの

この湖なら

誰も
わたし達を
とがめない。



ふたりで

ずっと





生きましよう。



ふたりの小さな湖畔は
平和に満ちていました。



姿かたちもそっくりな
双子の姉妹は

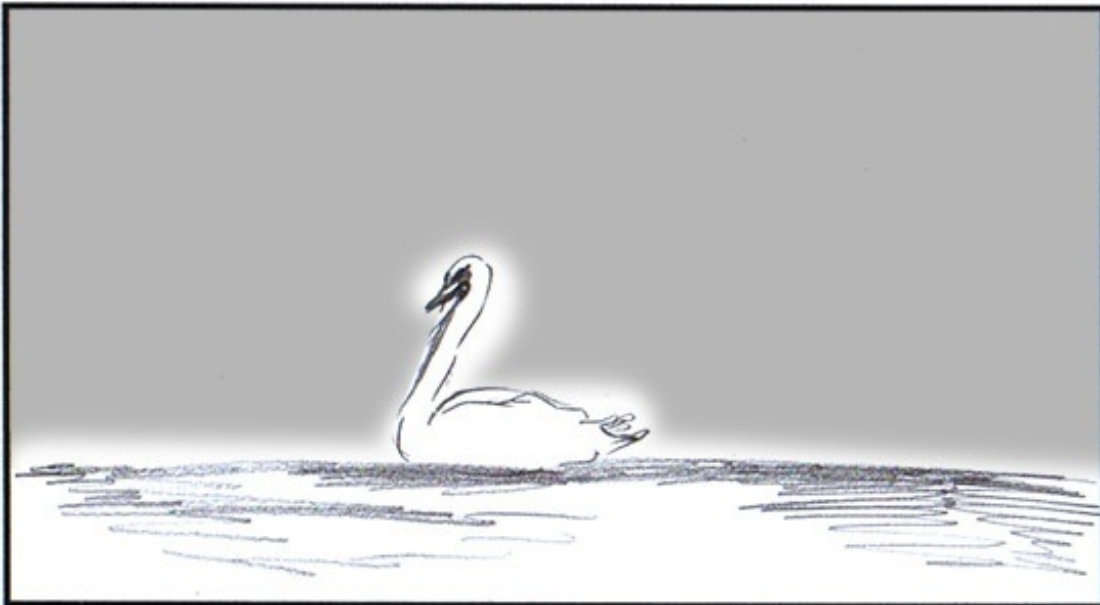


互いを支え
あいながら

おだやかな
毎日を



おくって
いたのです。







そうなんだ。

でも
さびしいだろう？



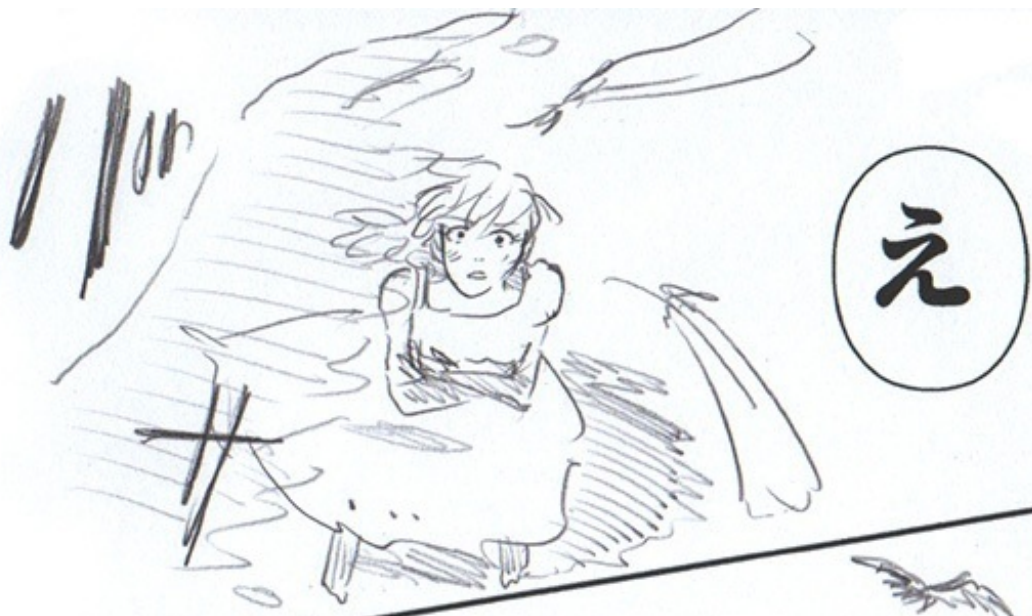
…ええ。



君の羽
とても美しいね

また明日
ここに来るよ！





双子の姉は

恋にあちました。



どうしたの？



姉さん

いいえ



白鳥？

はばたく音がしたわ



フクロウ？

フクロウよ

双子の姉は

妹に
はじめてウソを
つきました。



次の日は
雪でした。



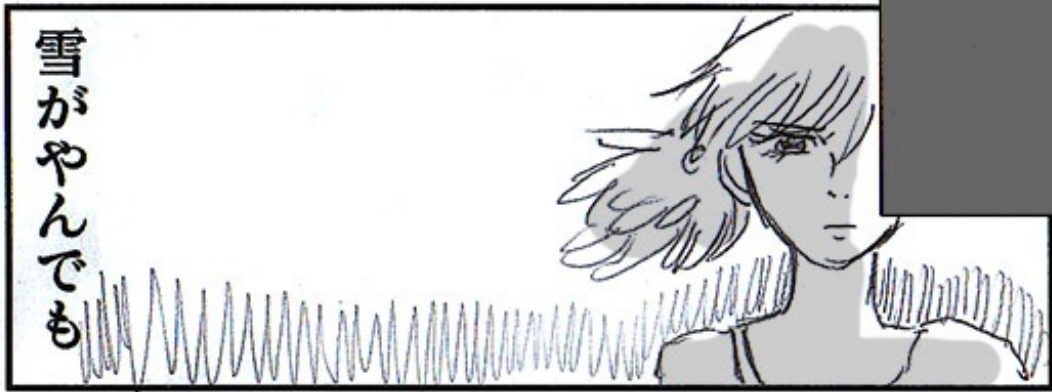
湖がよく
見えない…



はやく
来ないかしら。







雪がやんでも

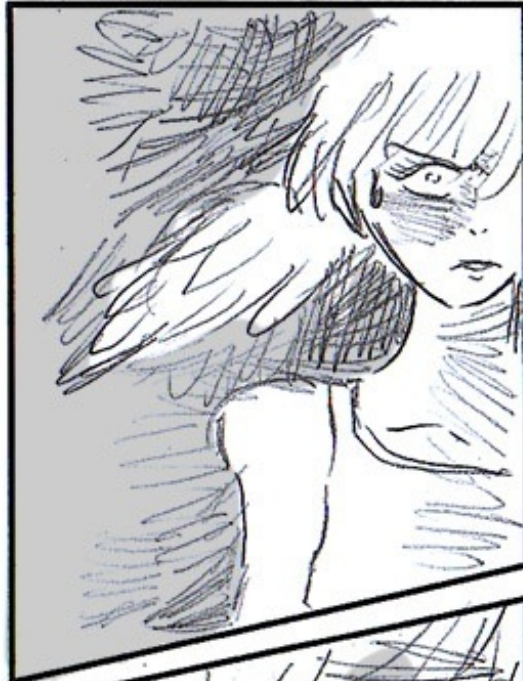


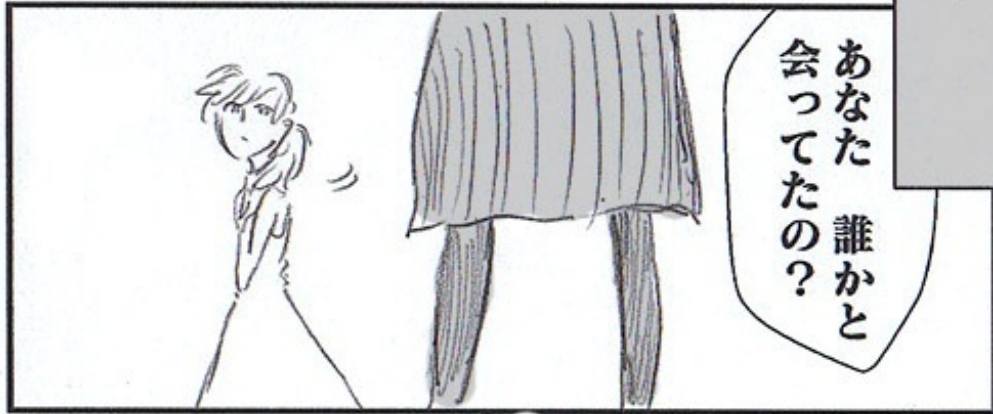
あの人は
来なかった。



!!

!!





あなた 誰かと
会ってたの？

オスの
白鳥よ



ええ



私を好きだと...



私の羽を
とてもきれいと
言ってくれた。

ちがう！



間違えたのよ

わたしとあなたをね



え？



姉さん？

スッ



あそこに居たのは
確かに
君だった。



美しい羽を
もっていた。



いいえ

あ・れ・は
わ・た・し
じ・や・な・い！



ウソを言うなよ

ここには
君しか
居ないんだらう？

君は



じゃあ



一体誰なんだ?

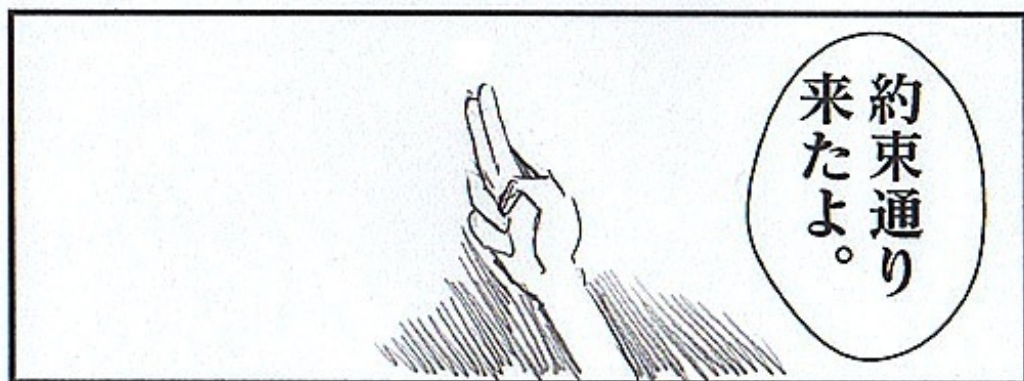
...



姉は恋人に
ある約束をしました。

「次の満月の夜
わたしを愛しているならば
ここで永遠の愛を
誓おう。」





約束通り
来たよ。



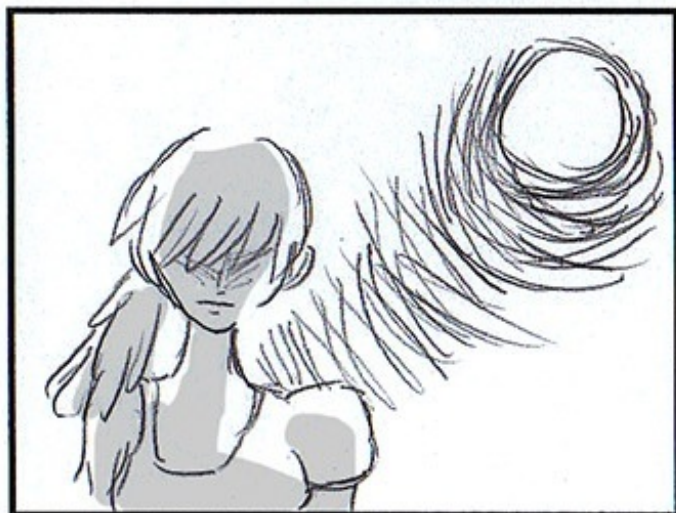
君と



永遠の愛を
ここに誓う。



姉さん
姉さん



間違いよ。



約束を
したのは
わたしよ。

どうして
アンタなの。

選ばれ
るの？

どうして
アンタが

美しいからよ。

…！





誇りをもてと
言ったのは
姉さんよ。



私を美しいと
言ったのも
姉さんよ。



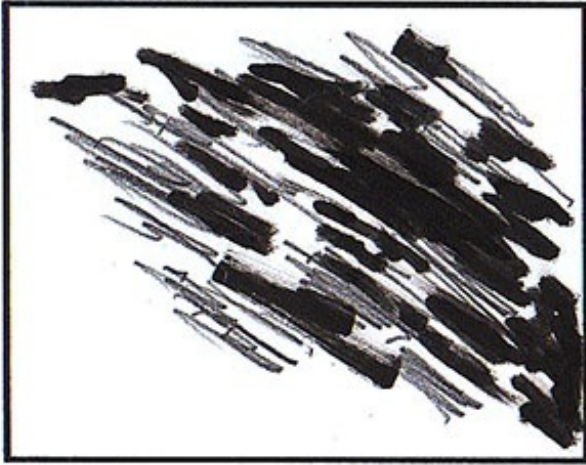
美しいのならば
私が選ばれて
当然でしょう？



何も

知らない
クセに!!





すべてが終わって

姉は気づきました。



守り続けてきた

「自らの美しい魂」
そのものだったことに。



殺してしまった
双子の妹は

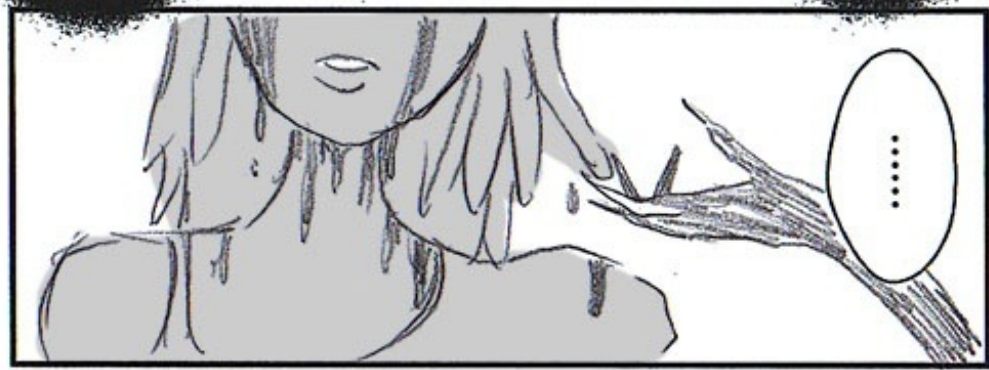




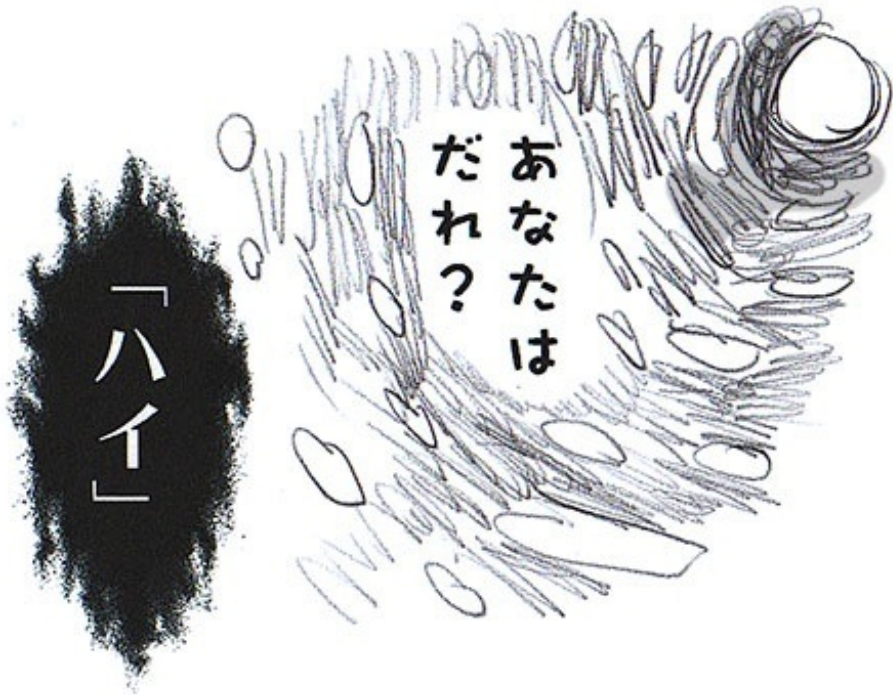


お前は
私とおなじ
夜の鳥。

「黒鳥」
だろう？



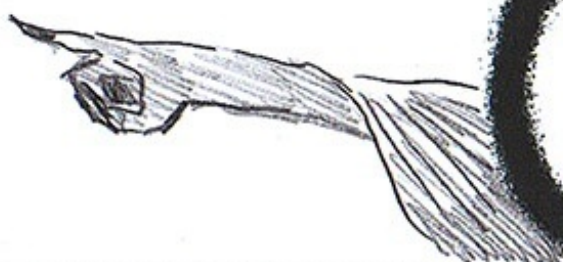
...



あなたは
だれ？

「ハイ」

あの
白鳥を。



ごらん



ハクチヨウ？

私が人間から
白鳥に
換えてしまったのさ。



オデットだ。

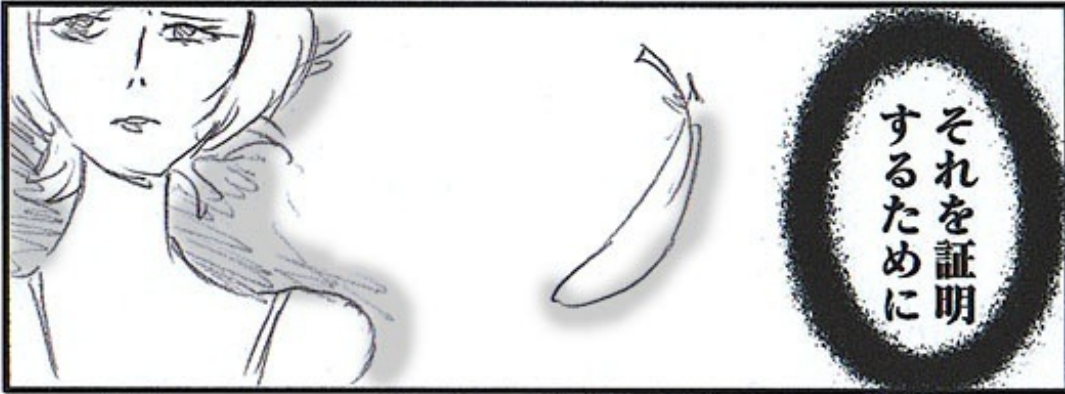


「オデット」

そうだ



しかもオデットは
一国の王子と
愛を誓っている。



それを証明
するために



必要なのさ

お前の黒く
妖艶な美しさが



「うつくしい」

我が娘

「あなたの
むすめ」

オデイル

私と王宮へ
向かい

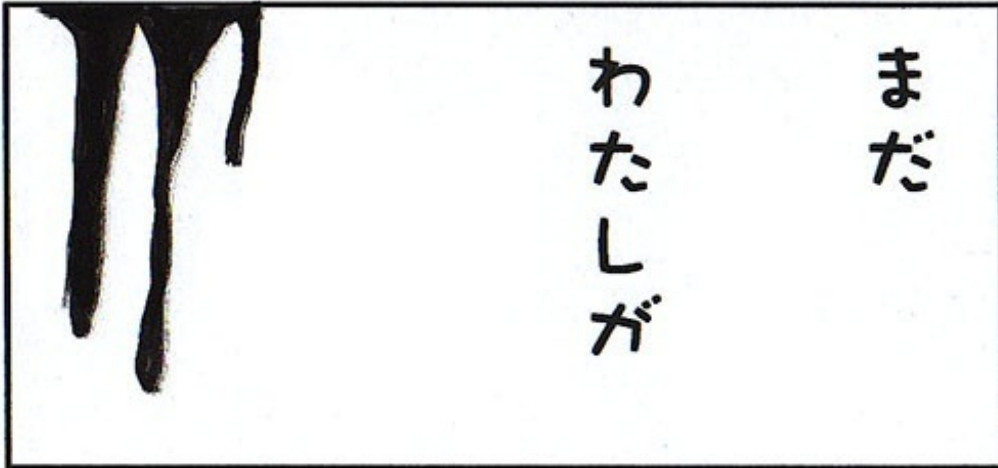
王子を
たぶらかせ

お前の名は
オデイルだ。

オデットが王子と
身を投げるラストに



一役
買って
おくれ。



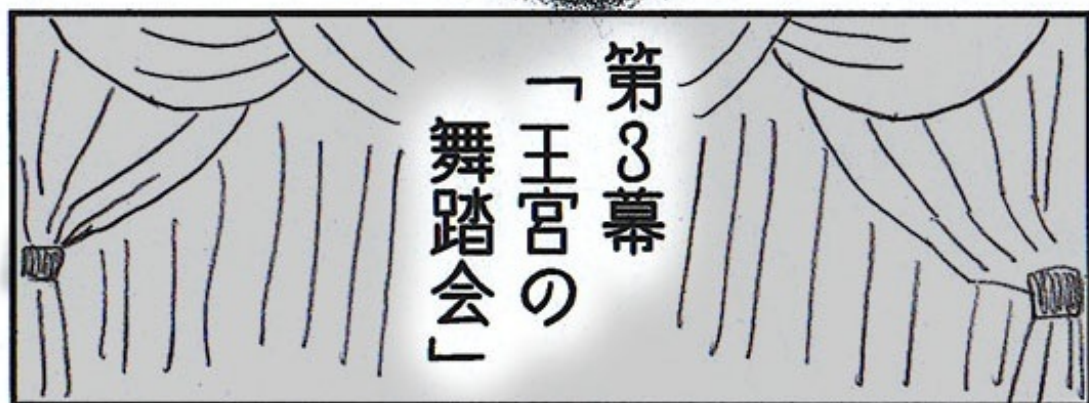
まだ

わたし
が



うつくしい
ので
あれば。

「ハイ」



第3幕
「王宮の
舞踏会」

血に濡れた
「白鳥」は

舞台に
飛んで
いきました。

悪魔ロツトバルトの娘

「黒鳥」
オディール役として。



おしよい managols
2012.11.24